

手洗い、うがいで予防

夏に流行するいわゆる夏かぜ。その代表がヘルパンギーナ、手足口病、咽頭結膜熱（プール熱）です。飛沫（咳やくしゃみを介して）や、接触、経口（ウイルスの付着した手指などを介して口や目の粘膜などから）によって感染するため、予防には、手洗い、うがいなどが重要です。

ヘルパンギーナと手足口病はコクサッキーウイルスが主な原因です。ヘルパンギーナは3日前後の潜伏期

■ 夏流行の小児感染症

三友 正紀医師



間の後、高熱とともに、のどに水疱がで、強い痛みを訴えます。通常高熱は3日程度持続します。手足口病は4日前後の潜伏期の後、発熱（高熱にならない時）も、のど、手足、臀部などに水疱を形成し、治癒後に爪の脱落を起こすことも。

咽頭結膜熱（プール熱）はアデノウイルスが原因で、5〜7日の潜伏期間の後、3〜5日間続く発熱、のどの痛み、目の充血や眼脂などの結膜炎症状を認め

ます。咽頭や眼脂、便から、数分で結果の分かる抗原検査を行うことができますが、アデノウイルスには多くの型があり、検査で全てをカバーしていないため陽性にならない場合もあります。

夏かぜのウイルスに対するワクチンや、ウイルスそのものに対する直接的な治療はなく、比較的症状が軽い場合、安静、水分補給などの対症療法を行います。自然治癒を待ちます。し

かし、のどの痛みで水分が取れず脱水になる危険性や、高熱による熱性けいれん、そして非常にまれながら髄膜炎、心筋炎など重篤な合併症を起こすことがあるので注意が必要です。

今年も例年以上に手洗い、うがいの重要性を認識されていることと思えます。感染症予防の基本ですので、普段から正しい方法を意識して行いましょう。

（県医師会、医療法人 健恵会 ねもとキッズクリニック）

次回掲載8月24日

協力・県医師会